

コロナ禍における 学生の不安と支援のあり方

安全対策以上に求められる安心対策



濱名山手学院 理事長・学院長 関西国際大学 学長
濱名 篤

6大学共同プロジェクト CCP6 調査から

新型コロナウイルス感染症の影響は首都圏のみならず全国に及んでいる。この状況で学生がどのような不安を抱えているのかということや彼らの意識や行動については、個別大学が行っている調査と奨学金や就職活動に焦点を絞った民間の調査が見られるものの、地域状況等も踏まえた把握は十分に行われていない。

ここでは、全国の中小規模の6大学が連携して実施した連携教育プログラム「Consider Corona Project 6大学 (CCP6)」の中で企画・実施した学生対象の「新型コロナウイルスによる学生生活への影響に関する調査」の結果を用いて、学生達が抱えている不安についてみてみよう。参加した6大学(関西国際、名桜、宮崎国際、共愛学園前橋国際、淑徳、富山国際)1短期大学(宮崎学園)のうち、本学と個別に協力協定を結ぶ名桜大学を除き、他は2012年に創設した地域を越えた大学間連携のためのコンソーシアムである一般社団法人学修評価・教育開発協議会のメンバーで

あり、学修成果の可視化、IR、学習プログラムの開発等をこれまでも協働してきた。

CCP6は、新型コロナウイルス感染症を素材として、Zoomを活用し学生達が地域を越えて遠隔方式で行う学習プログラムで、単位を伴わない。テーマは「新型コロナウイルス感染症が社会をどう変えたか、どう変えていくか」で、コロナ禍が社会にどのような変化をもたらしたのか、これからの社会をどのように変えていくのかについて考えるということを目的としている。学生にとって、少なくとも前期は対面授業が少なく、海外プログラムや地域社会での学習機会も制約され、ともすれば孤独なる学習に陥りがちであった。コロナ禍は、学生が興味を持たざるを得ない関心事であり、共通体験であることから、この事象を学習テーマにして参加学生を募集した。

小テーマを①安全・安心
②街づくりと観光③流通・購買行動④学校教育・子どもの生活の4つとし、テーマ別に各大学の教員の指導のもと、7

月から12月にかけて実施した。参加学生にとっては、日頃接することのない異なる地域の学生との協働を通じて、新たな人間関係の構築をはかるとともに、自分達の価値観や生活を再考する機会となったようである。

この調査は①安全・安心の分科会の学習の一環として実施し、調査の概要は下記の通りであった。参加学生は4大学(関西国際、名桜、富山国際、共愛学園前橋国際)から27人であり、筆者自身も指導に当たったほか、本学の教員数人が参加してくれた。この調査の特徴は、安全・安心についての学生達の関心に基づいて、彼らが質問紙を作成したことである。1) 授業方式に対する評価や不安、2) 成績と授業の理解度、3) 生活時間や生活意識の変化、4) 悩みごとと相談相手、5) 不安についての意識、6) 就職活動と進路意識の変化といった項目は、学生

達の関心に沿って設定した。調査の実施は各大学の協力を得て行われた。

学習形式についての評価と不安

今年度の前期は、全国の大学で様々な授業形式がとられていたが、CCP6の大学も例外ではなかった。調査結果では遠隔・ハイブリッドでの受講が多く、後期になってからは対面もしくはハイブリッドでの受講者が多数を占めていた。他の調査結果と同様に学習時間については、増加した者と減少した者、変化していないという者に3分されていた。前期の成績については、2年生は成績が改善した者が44%、3年生では30%、4年では16%。悪化した者は2年で24%、3年で16%、4年で13%と、全体的には成績は昨年度より良くなっていた。これはレポート課題による評価が増え、筆記試験が減少したためかもしれない。

学生達は前期の授業をどう受け止めていたのか。講義形式についての評価をみたのが図1である。4つの方式を上げて評価させたが、対面方式が相対的には最も評価が高く、オンデマンド方式の評価が最も低かった。オンデマンド方式は学修者の都合によって場所や時間を選ばないで学習できるメリットがあり、繰り返し視聴もできるので、知識伝達には活用の仕方次第で有効という声も聞けるが、対象となった6大学の学生の評価は決して高くない。一人で学習することについての不満はやはり強かったし、オンデマンドで提供されるコンテンツの質的改善は不可欠であろう。

図1 講義形式に対する評価

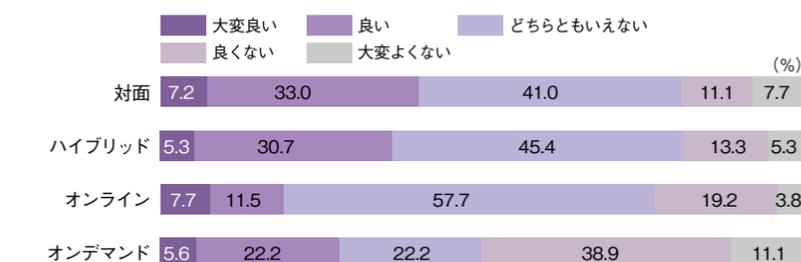


図2 講義形式に対する不安

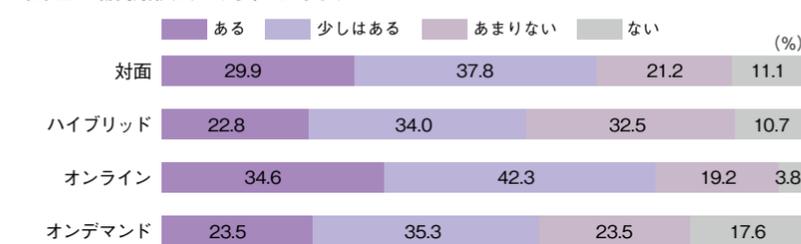


図2はそれぞれの講義形式に対する不安について質問した結果である。感染拡大の第2波から抜け出し、第3波となる前の11月下旬~12月初旬に聞いているが、どの方式においても不安を感じている学生が過半数を占めている。参加した学生達との議論の中では、安全と安心の違いがこの結果の理由ではないかという意見が多かった。この学習プログラムを始めた当初は、6つの大学の所在地による条件の違いによって学生の意識の差が出てくることを想定していたが、学生達は次第に属性の違いとともに、「個人差」に注目するようになってきた。台風や地震のような自然災害の安全度が、事前事後に数値化された客観的な指標で測られるように、「安全」というのは定量的な尺度がある程度可能である。他方、「安心」というのは主観的な尺度で測られるものであり、同じ地域、環境、条件であっても個人の認識による差異が大きく影響する。コロナ禍については感染者数、重症者数・率等の安全一危険に

ついての尺度だけでなく、安心—不安の軸での主観的な尺度で見れば個人差が大きくなっている。感染予防策を取ったとしても不安を感じる学生は必ず一定数いるということになる。

それでは不安の内容はどのようなものなのか多い項目を図3からみると、最も多いのは「知識・スキルが本当に身につけているか不安」が71.6% (「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」合計)で、物理的な制約である「演習・実習が十分にできないことが不安」(71.2%)と並んで多い。これらに次いで「クラスメイトと理解度の共有ができないため不安」(66.4%)「授業で理解できないことがあっても、相談することが難しく不安」(64.3%)となっており、対面コミュニケーションによる確認や相談がしにくいことが不安の中核となっている。

「知識・スキルが身につけているかという不安」は成績が不振であった学生だけが感じているわけではない。図4は前の学期と比べ「成績が良くなった

図3 遠隔講義での不安の内容

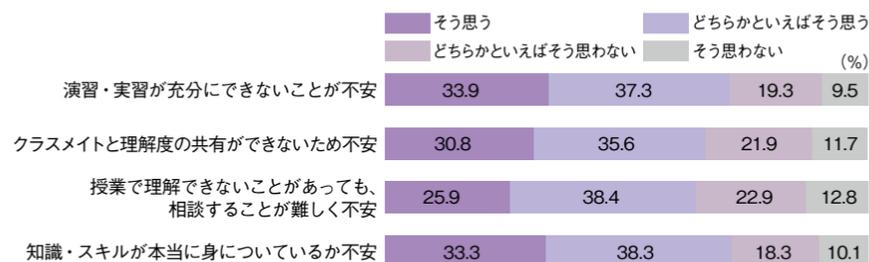
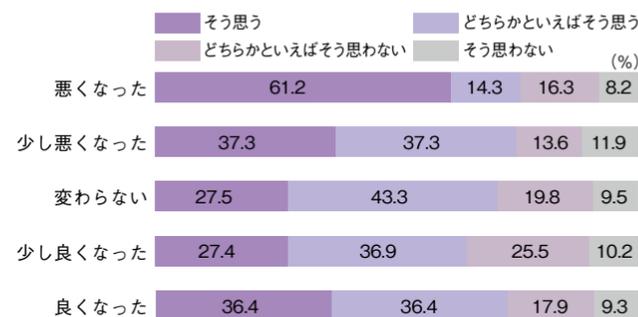


図4 前学期からの成績(上昇・下降)別にみた知識・スキル取得への不安



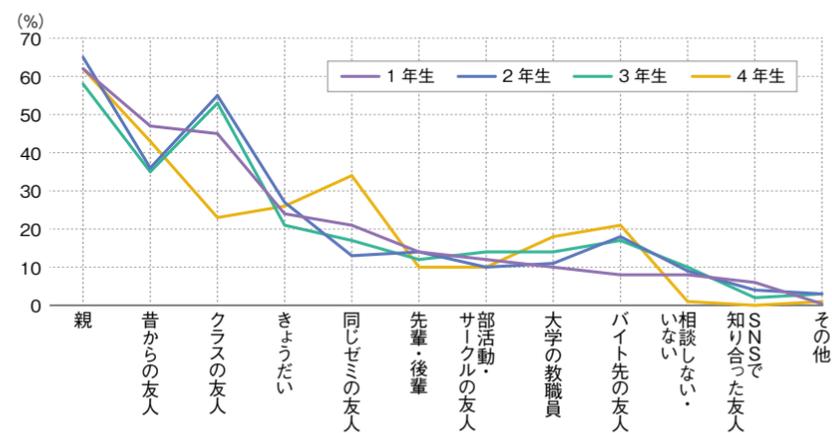
か、悪くなったか」という質問への回答ごとに、知識・スキルの習得感への不安をみたものである。「成績が悪くなった」グループでは「身につけているか不安」と回答した者は「そう思う」61.2%、「どちらかといえばそう思う」14.3%と4分の3に達するが、「良くなった」グループでも「不安」と回答した者は72.8%に達しており、成績に関係なく大多数の学生が不安を感じている。知識・スキルの習得感を実感させ、自己効力感を高められるかということはオンライン学習が抱える大きな課題のひとつであろう。

それでは、学生はこれらの様々な不安や悩みごとを誰に相談しているのだろうか。最も多いのは親(65.4%)で、以下「クラスの友人」(52.0%)、「昔からの友人」(44.0%)、「きょうだい」(25.6%)、「同じゼミの友人」(21.3%)となっている。家族と大学の友人が主な相談相手であり、残念ながら教職員

は多くない(12.8)。

図5は学年別に相談相手を比較したものであるが、1年生は前期の対面授業がほとんど受けられなかったこともあって、「昔からの友人(高校までの友人)」が多く、「同じゼミの友人」や「先輩」が少ない。対人ネットワークを確立すべき時期の空白はまだ埋められていないようである。4年生になると友人との場がクラスからゼミにはっきりとシフトしている。

図5 悩みごとの相談相手(学年別)



学生は何に不安を感じているのか

学生達は生活や行動が大きく変化している中でも不安に直面し続けているが、仮に自分が感染した場合に、どのような不安・警戒を抱いているのだろうか。図6をみると、家族や友人等、身近な周囲の人に対する影響が及ぶことに対しての不安が強く、9割以上に達する。自分自身の健康への影響(重症化、死亡)への危惧より、感染予防が不十分であったことへの社会からの批判(85.6%)も含め、周囲との関係が学生の不安の種であることが分かる。大学として感染者の個人情報の取り扱いや感染者保護に最大の注意を払う必要があることを示す結果である。

就職活動については、様々な調査で明らかにされているように、採用活動の方式や時期、採用人数等の変化を学生達も実感していた。希望する業種の変化をみると、観光や旅客業の希望者がコロナ禍前の3分の1程度に激減し、IT系等の希望者が増加していた。図7のように、職業を選択する基準の多くは激変していなかったが、「在宅勤務、

テレワークができる」ことが急増していることは注目に値する。対面接触を避けたいという安全・安心志向が強まっていることが分かる。

誌面の関係で十分説明できないが留学生対応も忘れてはならない。アルバイト時間の減少した留学生は81%に達している(日本人は39%)。その結果、生活費に困っていると答えた留学生は84%(「困っている」48%、「どちらかといえば困っている」36%)と極めて深刻な状態にある(日本人は計39%)。困っている学生は、とりわけ政府の臨時給付金やJASSO特別無利子貸与型奨学金といった公的支援を「利用していない(=知らない)」者が多い。公的支援は留学生の“命綱”であり、大学としても細やかな情報提供と相談体制を一層強化していくことが重要であろう。

次年度に向けて

これまでみてきたように、学生は学習、生活の両面で様々な困りごとに直面しながら、懸命に学生生活を送っている。新型コロナに感染することへの不安は一定存在し続けており、授業形式における安全対策を取るだけでは学生の安心感は得られにくいし、今後の感染症抑制対策の成否に拘わらず今後も不安感は存在し続けるだろう。

学習面では、一定の成績をあげているが、本当に実力が身についているかが不安であり、最も恐れていることは“孤立”であるようだ。講義形式がオンラインである者や1年生、周囲に悩みや困りごとを相談できない者など、十分な交流や支援を受けることができ

図6 コロナ感染した場合の心配事

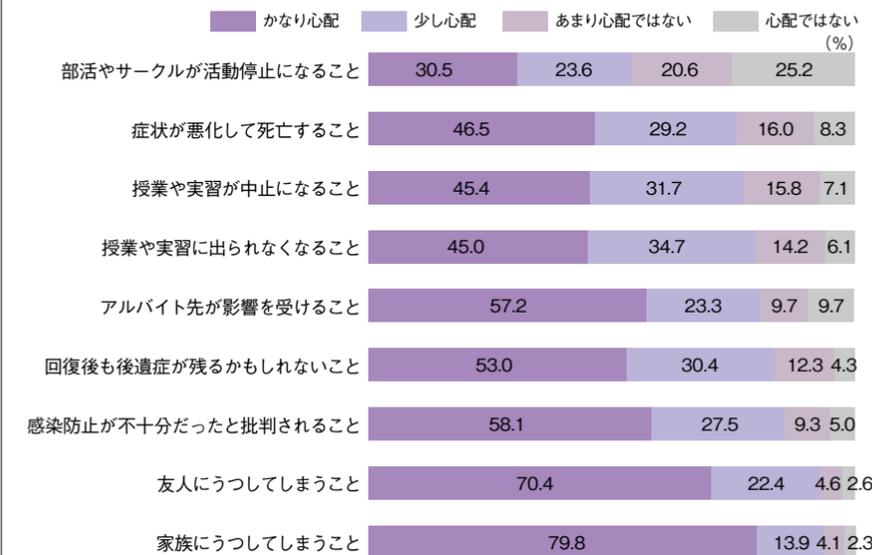
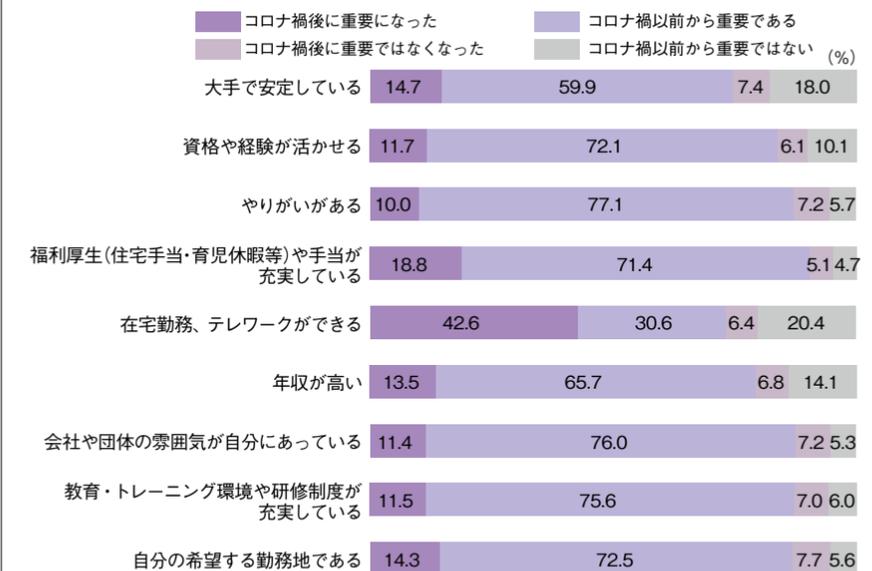


図7 就職する際に重視する条件の変化



いない学生への対応支援が大学に強く求められる。

現代の学生は、自分の健康以上に周囲の人に対する迷惑を掛けたくない不安が最も大きい「優しい若者」なのかもしれない。安全は客観的に測定できるが、安心は主観的な要因であり、個人差が大きい。不安を抱える学生に対し、大学としては、①速やかで明確な情報発信と個人差を念頭に置いた細やか

なフォローアップ、②孤立する学生が発生しないような学生同士の対人コミュニケーション機会(とりわけ対面型の学習機会の確保)の提供、③個人情報と感染者保護をさらに強化していくことが望まれる。シェークスピアの名言「明けぬ夜はない」(ハムレット)を思い出しつつ、必ずこの夜が明けられることを信じて支援をしていきたいところである。